

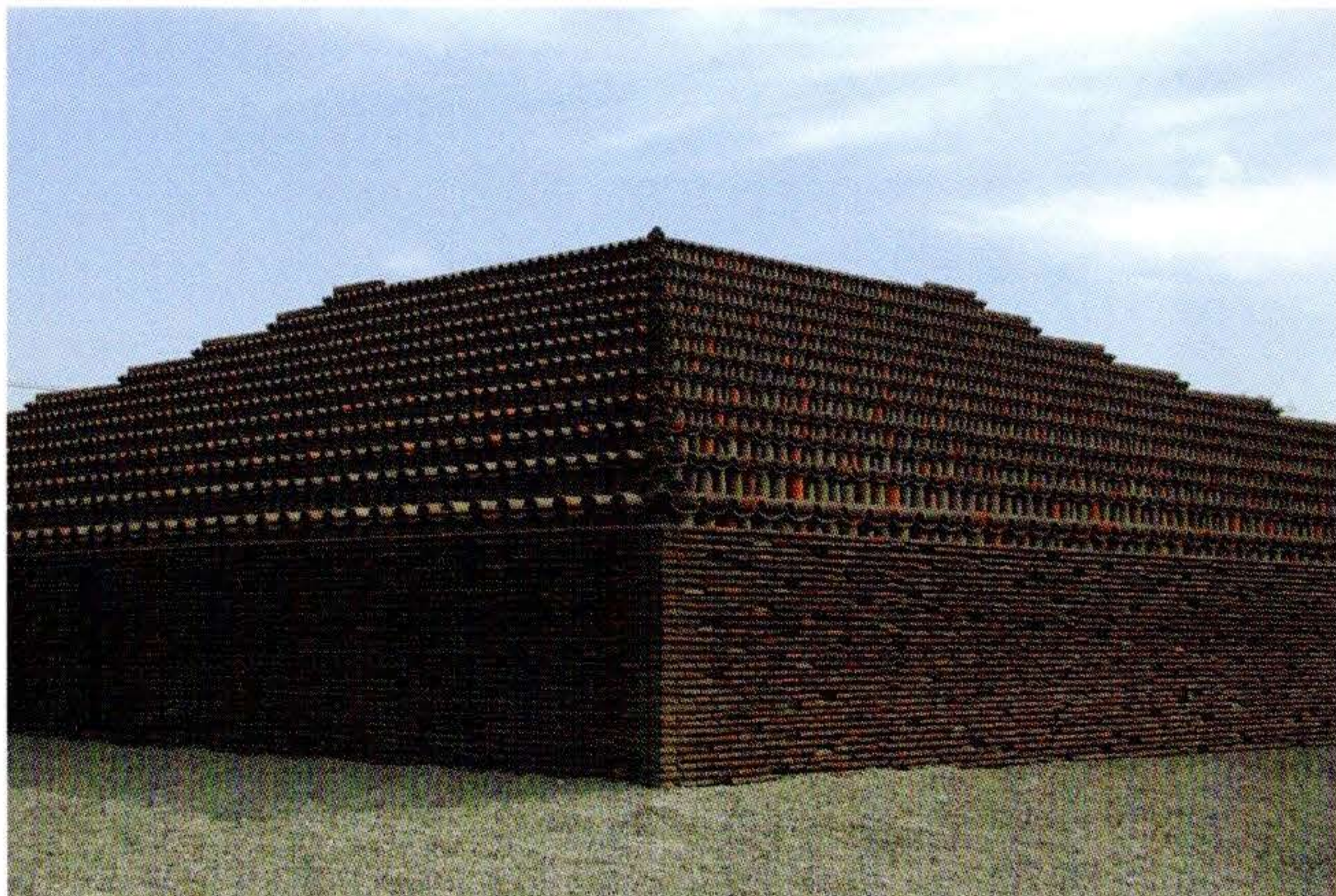
史跡土塔

堺市中区土塔町 2143-1

(昭和 28 年 3 月 31 日 指定)
(平成 17 年 3 月 2 日 追加指定)

土塔は、堺出身の奈良時代の僧、^{ぎょうき}行基が建立したとされる四十九院のひとつ、大野寺の仏塔です。

平安時代に書かれた『^{ぎょうきねんぶ}行基年譜』には神亀 4 年(727)の起工とあり、鎌倉時代の『^{ぎょうきぼつぎょうじょうえてん}行基菩薩行状絵伝』(重要文化財)にも、本堂・門とともに「十三重土塔」と記された塔が描かれています。発掘調査によって土を盛り上げた一辺 53.1m、高さ 8.6m 以上の十三重の塔で、各層には瓦が葺かれていたことがわかりました。また、『行基年譜』の記述と同じ「神亀四年」と記された軒丸瓦も出土しています。現在の姿は全体を盛土で保護し、十二層まで復元したものです。土塔から北西約 160m のところには土塔に使われた瓦を窠跡が 2 基見つかっています。また、約 460m 北方には行基が天平 13 年(741)以前に造った「^{こもいけ}薦江池」ではないかと考えられる「^{こもいけ}菰池」というため池もあります。



土塔を造った僧 -行基-

行基は天智天皇 7 年(668)に現在の堺市西区家原寺町付近で生まれました。地名の由来にもなっている家原寺は、行基が慶雲元年(704)に生家を寺としたものです。

行基は 50 歳半ば以降、精力的に活動範囲を広げ、仏教の布教だけでなく、橋を架け、灌漑用の溜池を造り、布施屋(人々の救済施設)を建てるといった社会事業にも尽力します。行基が大野寺土塔を建立するのはそうした活動のさなか、神亀 4 年(727)行基が 60 歳の時です。この他、堺市西区草部に残る鶴田池も天平 9 年(737)に行基が造ったとされています。こうした事業には、行基を慕う多くの民衆の協力がありました。その一端は土塔から多量に出土した人名瓦に見ることができます。

行基が布教を始めた当初は国から迫害を受けましたが、後にこうした活動が認められ、天平 17 年(745)には聖武天皇から東大寺の大仏建立を託され、大僧正という当時の僧侶としての最高位を贈られます。

天平 21 年(749)、行基は 82 歳でその生涯を終え奈良県生駒市にある竹林寺に葬られます。鎌倉時代の文暦 2 年

(1235)に行基の生涯の事績を記した墓誌が^{ぼし}発掘され、現在その墓誌の断片は奈良国立博物館に所蔵されています。

—交通案内—

泉北高速鉄道 深井駅より
南海バス「堺東駅前」行き乗車
「深井東町」下車すぐ。
または深井駅より徒歩 1.1Km
南海高野線 堺東駅より
南海バス「深井駅」行き乗車
「深井東町」下車すぐ。
阪和自動車道 堺 IC から 3.6 km



行政資料番号 1-L3-08-0298

国史跡

土塔

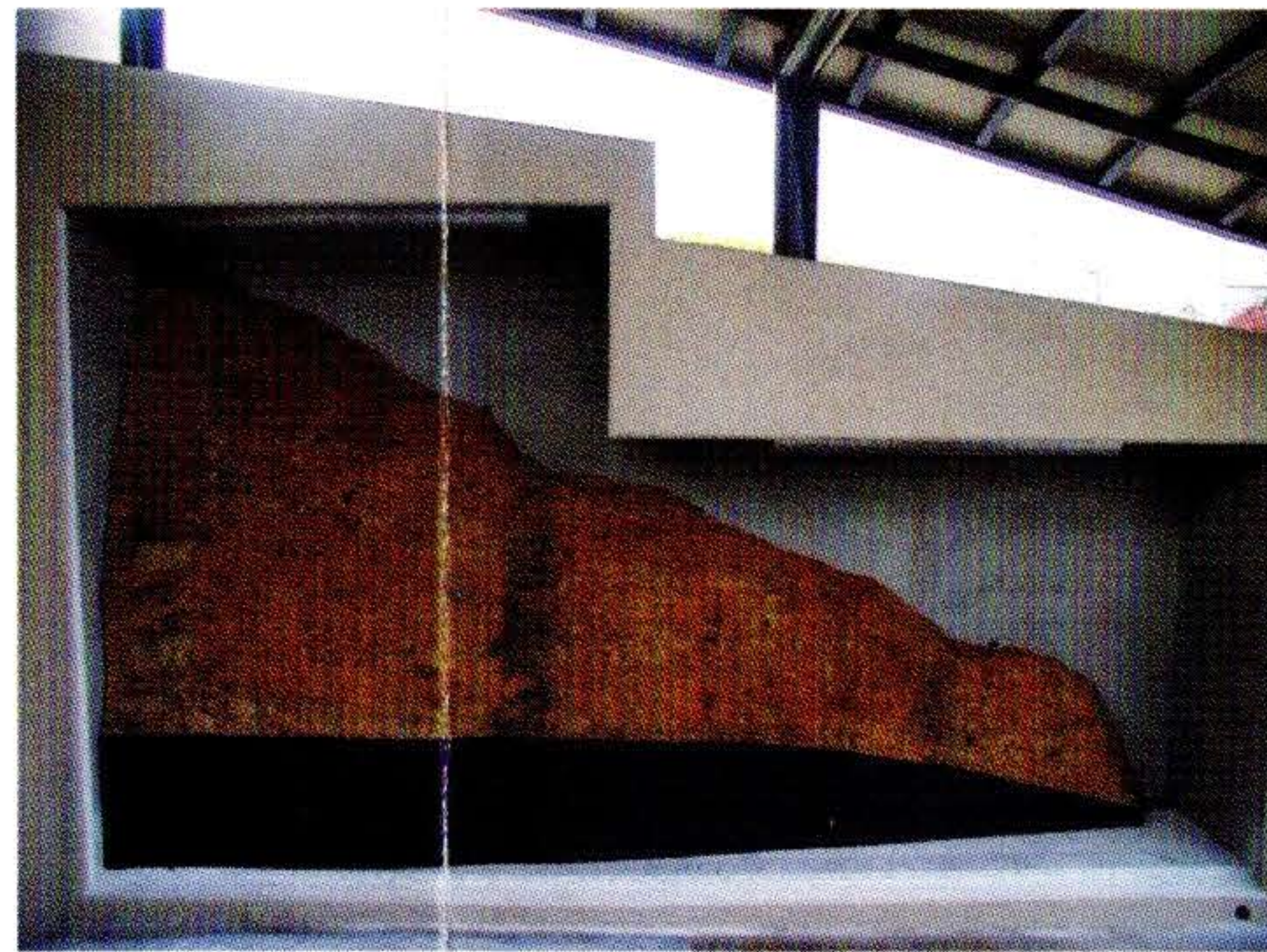


堺市

土塔の盛土工法

土塔は土を盛り上げてつくられています。はじめに地面を水平に整地し、タテ30cm、ヨコ20cm、厚さ10cm程の大きさに揃えた粘土の塊を、各層の輪郭となる位置に並べて正方形の枠をつくります。この枠の中に土を詰め、さらに枠を積み上げて上層をつくるという作業を繰り返しています。

ここに展示しているのは、西面の六層から九層にかけての断面を転写したもので、積み上げた粘土が土塔を上下に貫く柱のように見えます。



瓦葺と文字瓦

土塔には、全面に瓦が葺かれていました。その数は約60,000枚にもなります。また各層の垂直面にも瓦を立てて風雨による盛土の崩壊を防いでいたようですが、葺かれていた瓦の製作年代から、室町時代までは瓦葺の補修が行われていたことがわかります。

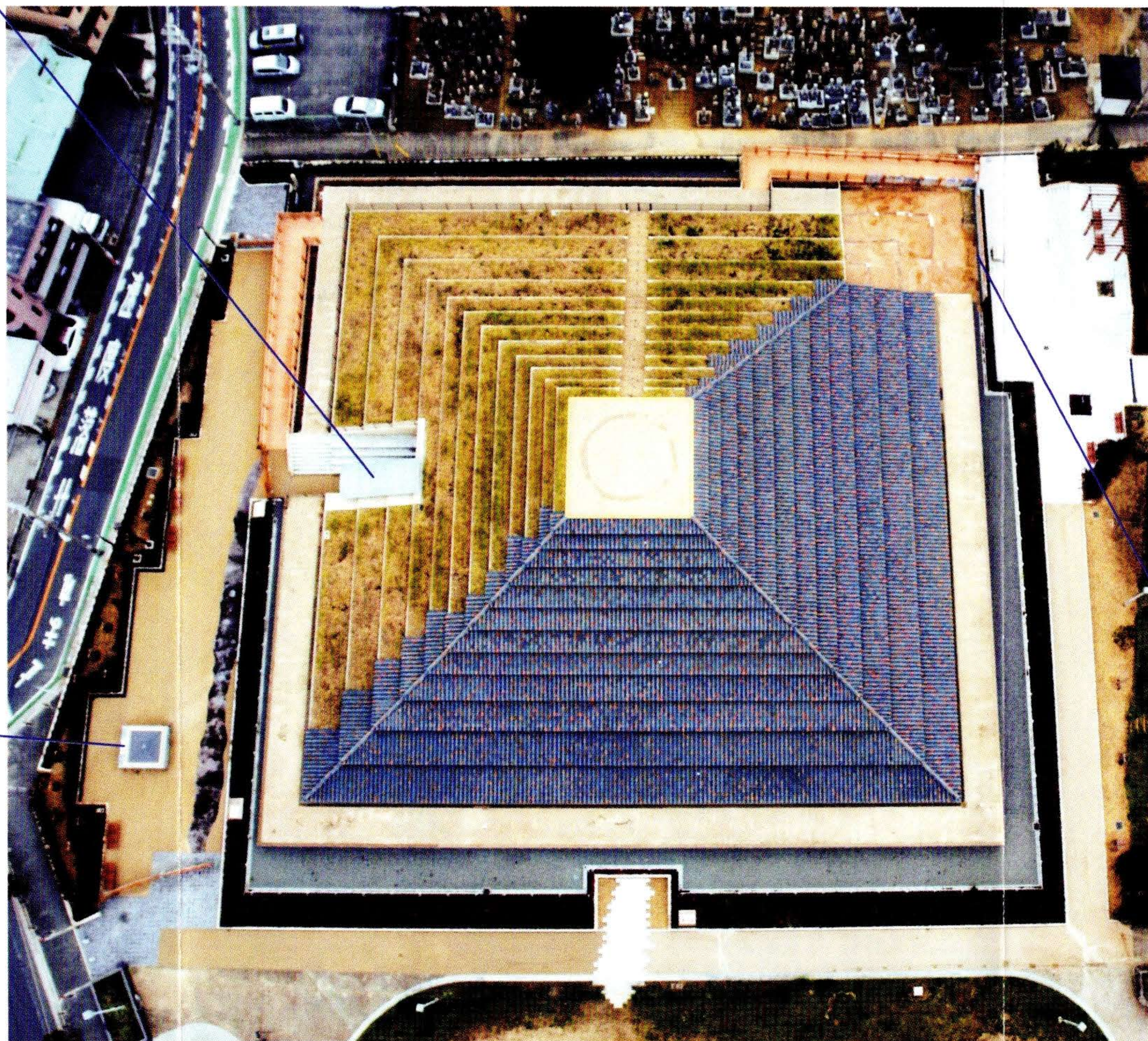
土塔からは文字を記した瓦が約1,300点出土しています。大半は人名で、行基と共に土塔を建立した知識と呼ばれる人々の名を記したと考えられ、男女を問わず僧尼や氏族の名前も見られます。



土塔の復元

発掘調査では十三層の形状が明らかにならなかったため、ひとつの可能性をこの模型で示しています。

十二層には直径約6mの円形に粘土が並んでいたことから、十三層は饅頭形の土壇の上に八角形の木造建物を復元しました。また、出土した遺物から木造建物には陶製の相輪があったと考えられます。建物の形状は、法隆寺夢殿(奈良県斑鳩町)や栄山寺八角堂(奈良県五條市)、室生寺五重塔(奈良県宇陀市)を参考にしています。



遺構の再現

ここでは発掘調査の遺構検出の状況を再現しています。築かれた当初の瓦葺は残っていませんが、基壇・初層・二層・三層の南東角や層の境が茶色や灰色の粘土の並びで確認できます。初層の奥の瓦は築かれた当初のものではなく奈良時代後半に補修されたものです。

外周には丸瓦や平瓦を積み上げた基壇の外面の化粧が残っていました。本来は1.2mの高さがあったと考えられますが、手前には崩れ落ちた大量の瓦が散乱していました。

